

(対象事業：~~地域連携強化事業~~・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：美のちから・生きるちから 葉山 | 鎌倉アート・プラットフォーム2010

事業者名：神奈川県立近代美術館

住所：神奈川県三浦郡葉山町一色 2208-1

TEL：046-875-2800（代表）； 046-875-2049（管理）

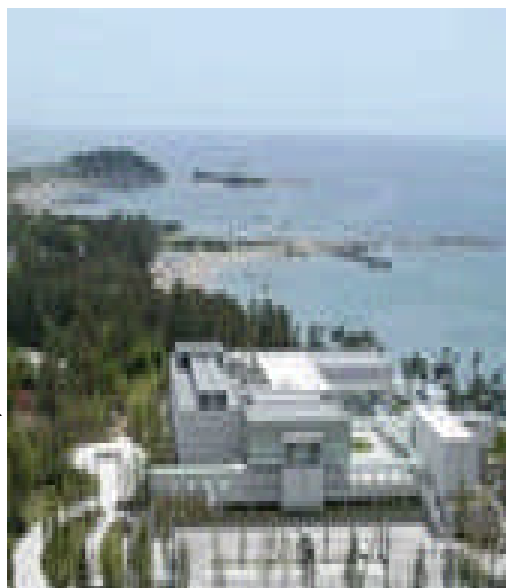
FAX：046-875-2574（管理）

HPアドレス：<http://www.moma.pref.kanagawa.jp/index.html>

連携事業者名：神奈川県教育委員会、葉山町教育委員会、鎌倉市教育委員会、逗子市教育委員会、かながわ国際交流財団、NPO 法人 ST スポット横浜ほか

会場：神奈川県立近代美術館 葉山、神奈川県立岩戸養護学校

事業期間：平成22年10月1日 ～ 平成23年3月15日



神奈川県立近代美術館葉山館

1. 館の使命と本事業の関係

神奈川県立近代美術館は、使命は 1951 年の創設以来、美術を通して自由な創造性の精神を育む、美術を通して異質な文化を理解する国際的な精神を育む、現代芸術の視点から過去の遺産を見直す批判的な精神を育む、という 3 つの大きな基本理念によっている。さらに近年における社会の変化、美術館に期待される要請、新しいアートに対する考え方等から、次の時代へ向けた美術館の方向性を模索し、地域や学校との密接な連携を果たすべく、学芸課から独立した普及課を設置、様々な連携とアウトリーチの活動を積極的に展開している。

本事業は、地域や学校との密接な連携のために 2010 年度に行われる 3 つのアート・プラットフォーム事業のうちの 1 つで、「彫刻家エル・アナツイのアフリカ展」に関連して行う事業である。

2. 企画内容

①事業目的

神奈川県立近代美術館は、1951 年に日本で最初の近代美術館として創設され、2003 年には葉山に第 2 の美術館を新しく開設、葉山と鎌倉の 2 つの場所を拠点に活動している。当館の使命は創設以来、美術を通して自由な創造性の精神を育む、美術を通して異質な文化を理解する国際的な精神を育む、現代芸術の視点から過去の遺産を見直す批判的な精神を育む、という 3 つの大きな基本理念によっているが、さらに近年における社会の変化、美術館に期待される要請、新しいアートに対する考え方等から、次の時代へ向けた美術館の方向性を模索している。特に葉山館の開館に伴って、地域や学校との密接な連携を果たすべく、学芸課から独立した普及課を設置、様々な連携とアウトリーチの活動を積極的に展開している。

そのような沿革から当館では、2007 年度から 2009 年度までの 3 年間、〈人づくり・学びの場としての美術館〉活用推進委員会というフォーラム組織を作り、美術館外の学校関係、NPO 法人、学識関係者等の人々とともに、今後の社会の中で求められる美術館活用の新しい理念について検

討を行ってきた。2010 年度から始めるアート・プラットフォーム事業は、この活用推進委員会の活動を継承・発展させることを目的としたもので、2010 年度から 3 年間の継続事業とし、各年度に開催される展覧会との関連を考えながら、しかし、全体としてもっと大きなフレームでの方向性を広く社会に提起することを目指している。

本事業は、2010 年度に行われる 3 つのアート・プラットフォーム事業のうちの 1 つで、「彫刻家エル・アナツイのアフリカ展」に関連して行う事業である。本事業を通じて以下の 3 つの目的を果たすことを意図している。

(1) 地域との連携と協働、出会いと交流の場としての美術館の活用

葉山は若い演奏者や熱心な音楽ファンが多く住んでいる土地で、これまでに開催したコンサートにも多くの入場者があった。この側面をさらに発展させることは、地域の出会いと交流の場としての美術館にとって重要である。さらに今回の事業では、これまで十分ではなかった横須賀地区への働きかけを行い、横須賀市にある県立岩戸養護学校との協働、同校へのアーティスト派遣、障害のある生徒たちの美術館への招待を行う。映像記録などを活用しながら、この活動を広報することによって、大人から子供まで、健常者も障害のある人にも開かれた美術館というイメージを広げ、活動基盤の拡大を図る。

(2) 学校教育・関係諸機関との連携

教員の他、NPO の協力を得ることで地元の特別支援学校にも参加を呼びかける。様々な障害を負った児童・生徒にも楽しい表現と鑑賞の場を与え、「美の力」を「生きる力」とするための活用を提起し、美術館への窓口をさらに広げたいと考えている。

(3) 異国と自分の文化、アートと自然のつながり

本事業は、エル・アナツイというガーナ生まれ、ナイジェリアで活躍する現代作家の展覧会の関連事業である。参加者は美術作品の鑑賞や文化人類的展示だけでなく、アフリカの民族音楽のコンサートを聴き、ワークショップを通して異国の楽器に直に触れることで、異国の文化の歴史、慣習、生活など様々な背景を学ぶことができる。さらには、実際に演奏することで、参加者自らが「音とリズム」の躍動、生命感を身体と心で実感することが重要な目的である。

②事業概要

(1) 事業の概要

当館が国立民族学博物館と共同で企画したアフリカ現代美術の展覧会「彫刻家エル・アナツイのアフリカ展」（2 月 5 日～3 月 27 日）に際して「「音とリズムでつなごう 葉山とアフリカ」コンサート&ワークショップ」と題して関連事業を行う。

ガーナ出身でナイジェリア在住のエル・アナツイ（1944— ）は、現代アフリカを代表する彫刻家のひとりで、1990 年代以降の世界的なアフリカ美術への関心の高まりを背景に際立った活躍を示してきた。本展では、アナツイの作品とともに、その発想のベースとなっているガーナやナイジェリアの文化的背景を、資料や写真、映像によって紹介し、アートと文化人類学というふたつの文脈で現代美術紹介と異文化理解を行う。

本事業ではこの展覧会の会場を舞台として、アフリカ、アジアの民族音楽の専門演奏家であるパーカッション・デュオの越智義朗、義久を招聘して、コンサート&ワークショップを実施する。

両氏は 1980 年代より数年にわたり、世界の各地でフィールドワークを行った後、民族楽器、自然素材、美術的オブジェを駆使し、人と地球を結ぶイメージを音楽で表現する試みとして「音とリズムのワークショップ&コンサートシリーズ」を欧米、日本各地の美術館などで続けて高い評価を得ている。

今回は両氏のワークショップの特徴である、流木、石、砂を楽器として用いる試みを葉山の豊

かな自然を活用して行う。素朴な自然の素材を楽器として用いることで、参加者は自らの自然、生活への眼差しを発見する。また、葉山とアフリカという異なる文化が「音とリズム」によって心身の中でつながれてゆくことが期待される。

また、地域の学校の生徒たち、とりわけ障害のある特別養護学校の生徒たちが、アフリカ音楽のコンサートとワークショップに参加することを通じて、アフリカ文化の魅力を体感し、異文化の理解を深めることを促す。さらに、そうした各学校、各施設との協働を通じて、地域の人々との連携の発展を図る。1日目と2日目は「ワークショップ」、3日目は専門の演奏家による「コンサート」と参加者による演奏の組立による3日連続の企画である。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

日程	場所	内容
2月9日： ワークショップ1日目	神奈川県立近代美術館 葉山	<p>ワークショップを行う前に、学芸員から展覧会のテーマ「つながる」について説明を受け、生徒それぞれが小さな布を集めてつなぎ合せて大きな布を作るというワークショップを行う。</p> <p>その後、パーカッショニストである越智ブラザーズの指導のもと、「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」の鑑賞を行い、作品を前に、一同で音のセッションを行う。楽器は木のスティック、小石、事前につくった学校の授業でつくったペットボトルを利用したマラカスなど。</p> <p>ワークショップ終了後、昼食をはさみ、各自の感想、体験記を書く。</p>
2月10日：ワークショップ2日目	神奈川県立岩戸養護学校	<p>学校の音楽室で、越智ブラザーズに指導のもと、音のセッションを中心としたワークショップを行う。前日に引き続き、木のスティック、小石を使いながら、素材の違い、打ったり、叩いたり、こする響き、3拍子、4拍子のリズム変化などを学ぶ。さらに、廃材のペットボトルに小豆、小石、海岸の砂、木の実などを入れてマイ楽器をつくって、演奏を行う。</p> <p>ワークショップ終了後、昼食をはさみ、各自の感想、体験記を書く。さらに、音をイメージして描く「ソニック・ドローイング」を行う。</p>
2月11日	神奈川県立近代美術館 葉山	<p>アナツイ展関連イベントとして企画したコンサート（一般向け）に、岩戸養護学校の生徒有志が参加。2日間のワークショップの成果発表であると同時に、一般の人と生徒たちとが音とリズム、作品を介して「つながる」ことが目的である。</p>

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 295 人

内 訳:

1 日目生徒 47 名、ワークショップ指導 2 名、付添教員 28 名、学芸員 5 名
2 日目生徒 47 名、ワークショップ指導 2 名、付添教員 28 名、学芸員 5 名
一般来館者: 70 名、演奏及び演奏指導 2 名、岩戸養護学校有志生徒: 8 名、父兄・付き添い教員 15 名、ボランティア 8 名、他関係者 30 名

(3) 事業により作成した印刷物等

- ・コンサートプログラム及びチラシ「ミュージアム・コンサート OCHI BROTHERS アフリカン・サウンド x エル・アナツイ」
- ・報告書冊子 「音でつながる、私とアフリカ in 葉山」

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

特になし

○テレビ、関連誌等

特になし

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

地域との連携という点で、大きな成果を達成することができた。コンサートには関係者も含めて 100 名が集い、そのエンディングでは、養護学校の生徒たちもボランティアスタッフに助けられながら演奏に参加し、聴衆、演奏者、美術館スタッフ、学校関係者、コンサートスタッフ全員に大きな感動と連帯感を呼び覚ました。「作品もすばらしかったですが演奏もすごくよかったです」「よいチャンスでした。よいひとときをすごせました」（アンケートより）。「遠方の為、高齢の為、早い時間帯をなるべく希望します」（同）という意見も寄せられた。

学校教育の関係諸機関との連携という点では、二日にわかるワークショップを美術館と養護学校という二つの場所を変えて行うことによって、教員、ボランティア（横須賀市ボランティアセンター登録）、演奏家、学芸員が鑑賞教育を、美術ばかりでなく、音楽まで広げながら、連携して深化させることに成果をあげた。「前日の打合せで生徒の特徴を上手くのせてもらえてよかった」（教員）「二つの芸術がコラボするという機会をどうもありがとうございました」（生徒）という意見もあれば、「たいこの音がにがてだった」という生徒の反応もあったが、付添いのスタッフが、そのような生徒については、やや離れて鑑賞するようにケアすることができた。事前にそのような対応をさらに具体的に検討しておく必要が今後ある。アフリカンドラムはかなりの音量で響くので、生徒によっては、配慮をする必要もある。

異文化の理解という点では、美術作品と音楽作品との両面で、アフリカの表現に接することによって、理解の幅を大きく広げることができた。「アフリカの土の臭いと大地の風と太陽から体全体に伝わった。音楽も自然とあわさっていてこれも「つなぐ」メッセージに通じてよかった」（教員）。さらに鑑賞用の映像なども用意できれば、さらに異文化の理解を深めることが可能であろう。今後の課題のひとつである。